

途上国アルバム：トルコ

佐藤桂子

世界銀行・アジア開発銀行コンサルタント

早朝から聞こえるアザーン（イスラム教の祈りを捧げるよう促す呼びかけ）、道に漂うケバブとトルコ・コーヒの匂い、市場に積み上げられた様々なスパイスの鮮やかな色、近所の小学校から聞こえてくる朝礼の国家斉唱、省庁のオフィスにあるアタチュルクの写真、エッセイを書き始めるとトルコで暮らしていた時の懐かしい音、匂いや色が蘇ってきます。2007年9月から3年間世界銀行トルコ事務所のリード オペレーション オフィサーとして首都アンカラに駐在しました。このポストは世銀のプロジェクト全体を監督することを主とした仕事内容で、電力、中小企業支援、保健、教育など分野を問わずトルコでの世銀プロジェクトを精査し、世銀ポートフォリオ全体の有効性を高めるための施策を実施するという、チャレンジングな任務でした。しかし3年間で目に見える成果をあげることが出来、私にとっては大いに満足できる仕事となりました。特に電力分野では分野研究、政策アドバイザー、プロジェクトを組み合わせた援助戦略をまとめた手法が世銀内部でも注目されたこと、財務省からの要請で、世銀の融資保証の分割の可能性を世銀法務局と検討したり、トルコでの仕事は色々な意味で刺激的でした。またトルコ政府が中進国として、はっきりとした世銀活用方針を持っており、世銀の中進国支援政策議論に関与出来たことも、任務をやりがいのあるものにした大きな一因となりました。



積み上げられたスパイス



トルコ・コーヒを男だけで楽しむおじさん達



中央アジアからのフェルト帽

私が駐在していた2007年から2010年は、トルコにとってはリーマンショック後の金融危機の影響を受けたものの、概して高成長の時期で、政権を担当していた AKP（公正発展党）も今とは違い、特に経済政策が功を奏したこともあり、国民からの一定の信頼を得ていた時期でもありました。GDPは2010年に9%の急回復を見、一人当たり所得も一万ドルを超え、トルコリラは\$ 1=1.3 ~2 リラの間で推移。EUへの加盟の議論もかなり

進展し、国民も自国に対する自信を強め、地域の盟主としての地歩を固めているように見受けられました。但し国内では‘世俗主義’と‘イスラム色の強い AKP’とのせめぎ合いが常にあり、そうした政治的対立が経済政策議論にも反映され、この国の持つ複雑な背景を目の当たりにすることの多い日々でもありました。特にこの時期大学での女子学生のヘッドスカーフを巡っての議論がありました¹、これは宗教的な議論と見られがちですが、実は経済的な背景も大きな要素です。アナトリア地方と呼ばれるトルコのアジア地域は、従来ヨーロッパ地域に比べて経済発展が遅れ、農業主体のイスラム色の強い地域でしたが、2000年代に入ってからの中産階級の勃興は、そうした地域からも首都のアンカラやイスタンブールなどの大学に女性が入学するようになりました。女性の高学歴化を必ずしも望んではいないものの、結婚に箔がつくといい理由でこうした地域の中小企業のオーナー達は娘の大学入学を許すようになり、アナトリア地域からの女子大生が増えるようになったのです。それまでは問題にならなかったヘッドスカーフが、こうした人々の流入によって目につくようになり、またこうした地域から出てくる人々を、無教養の農村住民と見下していた、アンカラやイスタンブールの裕福な世俗主義の人々との間で軋轢を起こしたということが、背景にあります。



ヘッドスカーフの女性



ヘッドスカーフのおばさん



こんなに可愛い女の子のスカーフも

こうした政治問題はさておき、トルコはどこを歩いても 3000 年以上にわたる歴史が呼びかける、素晴らしい国です。勤務地は首都のアンカラでしたが、歴史、文化、経済の中心はイスタンブール。イスタンブールは世界の中で一、二を争う美しい街ではないでしょうか？その昔「あの街が欲しい」と言ったメフメット 2 世の気持ちがよくわかります。もちろん建造物も素晴らしいのですが、ブルーモスクやアヤソフィアをバックにした四季折々の風情も捨て難い物があります。

¹ 大学や公的機関内ではヘッドスカーフは禁止されていた。初代共和国大統領のアタチュルクがそれまでの旧弊を排除するために女性のヘッドスカーフ、男性のあごひげを禁止。2013年に女性公務員のヘッドスカーフ着用が許可されている。



雪景色のタクシム広場



初夏のブルーモスク



夏のボスフォラス橋



色付くポプラと秋のブルーモスク

SRID の皆さんはイスタンブールの有名なところをご存知でしょうから、このエッセイではあまり触れられていないトプカピ宮殿の伊万里、有田の話を。私は日本や中国、韓国の陶磁器が好きで、伊万里や鍋島の作品を良く美術館で見たりしていたので、トプカピ宮殿の巨大な台所で、無造作に置かれた伊万里を発見した時は至福のひと時でした。これは当時のスルタンが毒味のために磁器を使用したため輸入されたのだとか。毒が盛られていると青磁の色が変わると言われていたそうです。トプカピには子供のこぶしほどあるダイヤを始めとして膨大な財宝やら、素晴らしいタイルやら見る物が多く、陶磁器にはあまり陽の目があたっていず、ゆっくりと見られたのが良い思い出です。しかもアラビア文字のある青磁のお皿もあって、かつての貿易を通じた日本とトルコの交流にしばし夢を見る思いでした。残念ながらアラビア文字のある青磁の皿の写真が私の写真には一枚もありませんでした。



トプカピ宮殿の伊万里皿



トプカピ宮殿の伊万里皿



トプカピ宮殿の青磁水差し



高くて買えなかったキリム絨毯'

イスタンブールの他にも、ご承知のようにカッパドキア、パムッカレなどトルコにはたくさんの見所がありますが、日本人の方があまり観光に足を踏み入れない、アナトリアの南の地域あるいは黒海地域にも素晴らしい遺跡が数限りなくあります。帰任する前に駆け足で回った、シリアとの国境のマ



ーディンでは、丘の上からシリア国境を越えて麦畑が広がる素晴らしい景色が見られました。この地域はシリアのみならず、中東地域からトルコ、ヨーロッパを目指して、隊商が通った道だとか。隊商宿がいくつもあって、流石にラクダを連れた隊商は見掛けませんでした。まさにアラビアンナイトの世界でした。私たちが訪れた当時は、シリア、トルコ間のビザの取得が簡素化されて、交流しやすくなったとマーディンの人たちは笑っていましたが、今はどうなっていることか。想像すると胸が痛くなります。またこのマーディンでは日本で勉強したという考古学博物館の館長の建築中の家を見学させてもらうことができ、アラビア風の彫刻が施された砂岩の美しい建築を堪能したことも良い思い出です。

マーディンの考古学博物館の館長の家

またマーディンからさらに50km程度東北に、ハサンケイフという中世のトルコ・クルド・アラブ遺跡が混在したチグリス川のそばにある遺跡があります。とりわけハサンケイフで一番目につくのは4つの柱が残っている橋の跡。12世紀にアルトゥク朝時代に建設されたものですが、残念ながら、ここから少し下流にあるイリスという村で計画されているダム建設で、このハサンケイフの遺跡がダムに沈むことになっています。トルコ国内、海外での反対運動もありましたが、現在すでにダムの建設が進んでいます。2017年5月には一部の遺跡を力技で移動したという記事も出ていましたが、橋や寺院のみならず、この地域の岩に作られた一万年以上前の住居跡などはすべて水没することになっていて、大変貴重な遺跡が失われることになっています。



ハサンケイフの遺跡



ハサンケイフの全貌（これはプロの写真です）



ダムに沈むモスク

こうしてトルコの思い出を書いていると、トルコで一緒に仕事をした仲間や、旅行中にであった親日家のトルコ人たちなど懐かしく思い出されます。世界遺跡の宝庫のようなトルコが、また楽しく安全に旅行のできる国に一刻も早く復帰するように切に願うばかりです。